

# 中国語訳「伊勢物語」の分析（1）

## —銭訳、豊訳、林訳の比較から—

田 中 幹 子  
鄭 寅 瓏

### はじめに

一昨年まで中国訳『源氏物語』『桐壺』において、銭稻孫訳が深い平安文化の理解を元いかに優れた訳であるかを豊子愷訳、林文月訳に比べながら明らかにしてきた。本年からは、同じ三人の訳が比較できる『伊勢物語』について分析していく。銭訳は『源氏物語』同様、部分的にしか現存しない。1942年7月に、満州国雑誌『芸文雑誌』の第1巻第1期に伊勢の1-13段を発表している。この他に第1巻第3期に14-25段、第2巻第10期に26段-35段がある。新中国が成立した後、銭訳の『伊勢物語』は一回整理されたが、1969年に貴重資料として三線建設の地区に郵送した時に紛失してしまった（注1）。国内現存の『芸文雑誌』は、この他に第二巻第10期に26段-35段がある。訳の時機は、『万葉集』の後、『源氏物語』を訳する前である（注2）。豊氏は『源氏物語』を終えた1965年以後、1970年から落窪・竹取・伊勢物語ともう一つ不明の物語の翻訳に取り組んだ。『伊勢物語』訳が1972年に完成され、出版は2011年7月（注3）。また曾維徳氏によると、林訳は、小学館新編日本古典文学全集本（1994年）、角川書店本（1993年）、および英訳『源氏物語』（1968年）を拠り所にするると述べている（注4）。林氏は、古典文学全集、『源氏物語評釈』、および英訳『源氏物語』を拠り所にするとの指摘が中国でなされつつあるが、確証はない。林氏も『源氏物語』を訳し終わってから、『枕草子』『和泉式部日記』に続いて『伊勢物語』を訳している。

本稿では、比較する便宜上、新日本古典文学全集『伊勢物語』の初段から三段までの本文・口語訳、銭訳と銭訳の日本語翻訳、豊訳と豊訳の日本語翻訳、

林訳と林訳の日本語翻訳を並べ分析する形態をとる。猶、銭訳、豊訳、林訳の日本語訳および、中国語の語釈に関する分析は神戸大学大学院文学部博士課程の鄭寅瓏氏によるものである。

### 第一段

(本文)

むかし、男初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすりごろも

しのぶの乱れかぎりしられず

となむ追ひつきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

陸奥のしのぶもち摺り誰ゆゑに

乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

(口語訳)

昔、ある男が、元服をして、奈良の京の春日の里に、所領の縁があって、鷹狩に行った。その里に、たいそう優美な姉妹が住んでいた。この男は物の隙間から二人の姿を見てしまった。思いがけず、この古い都に、ひどく不似合いなさまで美女たちがいたものだから、心が動揺してしまった。男が、着ていた狩衣の裾を切って、それに歌を書いて贈る。その男は、信夫摺の狩衣を着ていたのであった。

春日野の……（春日野の若い紫草のように美しいあなた方にお逢いして、私の心は、この紫の信夫摺の模様さながら、かぎりもなく乱れ乱れております）

と、すぐに詠んでやったのだった。こういう折にふれて歌を思いつき、女に贈るなりゆきが、愉快なことと思つたのであろう。この歌は、

みちのくの……（あなたのほかのだれかのせいで、陸奥のしのぶもじずりの模様のように、心が乱れだした私ではありませんのに。私が思い乱れるのは、あなたゆえなのですよ）

という歌の趣によったのである。昔の人はこんなにも熱情をこめた、風雅な振舞をしたのである。

### 【銭訳】

昔男がいた。初冠して、奈良の都の郊外である春日の里へ狩りに行った。そこはもともと持っていた領地である。里に非常に艶めかしい姉妹がいて、男はまがきから覗き見る。彼女たちが元の都にある貧しい家に住むことに対してあやしく思い、不思議に感じた。それで着ている狩りの袍の裾の一部を切り、歌を書いて送った。男の袍は思草の紋様に擦り付けられている。歌って云はく、

春日（春）の草木が生い茂る野、愛情が込められている新しい紫色（若い紫色）。衣を擦り付けて紋様に染めて、思草（草の紋様）は乱れ尽きない雅で子供っぽさが見れず、よく褒められている。蓋し

陸奥信夫の布、つきまどう思草の紋様。もちろん簡単に染めたわけではない、私の心が誰のために乱れているでしょうか

の句の意味を用いている。古人は風雅であり、才（歌を作る能力）がこのように素早かったのだ。

### 【銭訳・中国語】

昔有男。初冠游猎奈良京郊春日里，固采邑也。里有姊妹绝艳，郎窥自篱。心异其蓬华居旧国，惑焉。乃截所衣狩袍角，题歌以赠。郎衣之袍，拭染作思草文。歌云：

春日芊眠野 含情紫色新

拭衣成染纈 思草乱无垠

雅无稚气，良获赏叹。盖用

陆奥信夫帛 缠绵思草文

自非轻易染 方寸为谁棼

句意。古人风雅，才捷有如是矣。

### 【分析】

「艳」は「艶」の意。『伊勢物語』の「生めく」の「初初しい」とは異なり、艶麗の意として訳している。「思ほえず」が「心异」「怪しく惑う」。この段の眼目である「信夫摺」は、忍ぶ草の乱れ模様をすり染めたもの。その模様がよじれるので、「しのぶもぢずり」ともいう。これを銭訳では「思草文」「思う草の文」と訳し、「忍ぶ心」という一番伝えたい言葉が込められている語として意識されている。「追ひつきて言ひやりける」の部分が訳されておらず、「雅无稚气、

良荻赏叹「雅で子供っぽさがなく、姉妹によく褒められた」と歌に対する評価のコメントがあり、原文にない要素を盛り込んでいる。主人公を少年としてこの段を紹介している。

### 【豊訳】

昔一人の男がいた。髪を束ね冠をつける年になったばかりの頃、奈良の都春日野の近くの村に自分の家の領地があるため、そのところに狩りに行った。この村の中に、高貴で美貌の姉妹二人が住んでいる。この男は低い土堀の隙間から彼女たちをのぞき見る。この荒れ果てた村の中に頼りなげの二人の美人が住んでいることを思いもよらなかったのが、珍しくておもしろく思い、不思議に感じた。それで自分の狩りの服装から一枚の布を切り落として、その布の上に歌を書き、この二人の女に送った。この人が着ているのは信夫郡産の麻で作った狩りの服装である。歌って云はく

誰の家の姉妹は新緑のようだ（春に芽生える葉っぱ、新鮮の意味）。

私の恋心を麻のように乱してくれた。

年が若いのに、しゃべりはまるで大人の口調のようだ

あの二人の女子もたぶんこのような歌を興味深く思っただろう。

昔一首の古歌があった。

君の心はなぜ麻のように乱れているだろう。

私はまさに君のために苦労している。

先の歌はこの古歌の意味を巧妙に踏まえて作られている。

昔の人は、年がまだ若いのが、もう即座に風流の心持ちを表現することを試した。

### 【豊訳・中国語】

从前有一个男子，方始束发加冠之年，因在奈良都春日野附近的乡村中有自家的领地，所以到那地方去打猎。在这乡村里，住着高贵而美貌的姐妹两人。这男子就在墙垣的隙缝中窥看她们。想不到在这个荒凉的乡村里，无依无靠似的住着这么两个美人，他觉得奇妙，心中迷惑不解。就在自己的猎装上割下一片布，在布上写了一首歌，送给两个女子。此人穿的是信夫郡出产的麻布制的猎装。歌曰：

谁家姐妹如新绿，

使我春心乱似麻。

年纪还很轻，而说话全是大人口气。

那两个女子，大概也觉得这样的咏歌是富有趣味的吧。

从前有一首古歌：

君心何故如麻乱，  
我正为君梦想劳。

上文的歌，是巧妙地运用这古歌的意思吟成的。

从前的人，虽然年纪很轻，就会试行即兴地表现风流情怀。

### 【分析】

「若紫」を「新緑のようだ」と訳し、「若」の部分に重点を置き、「紫」が美人をさすとは伝えていない。また、「年が若いのに、しゃべりはまるで大人の口調ようだ。あの二人の女子もたぶんこのような歌を興味深く思っただろう。」という部分は、「追ひつきて言ひやりける」削除した代わりに入れた要素で銭訳と同じであり、銭訳を参照したことがうかがえる。「みちのくの」の歌意は私の心があなたによって乱れられる意に対し、豊訳では「君の心はなぜ麻のように乱れているだろう」と乱れているのは私ではなく君となっている。「新緑」の場合と同じく、受け身の文体のない中国語においては不自然にならないよう意識していると思われる。また「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。」の部分、豊訳では「年がまだ若い、もう即座に風流の心」として、称賛する重点を「年が若い」部分においている。豊訳は『伊勢物語』原文ではなく銭訳を基に、豊氏の解釈がなされているといえる。

### 【林訳】

昔、男がいた。初冠<sup>(一)</sup>したばかりだが、領地のため奈良京春日里<sup>(二)</sup>に狩りに行った。里に容貌や姿が非常に端正で美しい姉妹が住んでいる。この男は無意識的に彼女たちを垣の間から窺って<sup>(三)</sup>しまった。意外にふさわしくない。このようなぼろぼろな古い里の中にこんな光景があるとは、つい心の揺れと錯乱を禁じ得なかった。この男は着ている狩りの衣<sup>(四)</sup>のすそを切り落として、歌を一首書いた。彼が着ていたのは信夫染め<sup>(五)</sup>の狩りの衣である。

春日野、信夫染め、

君たちの容貌を窺うことができ、心が乱れる。

この紫の紋様のように、感情を抑えられない。<sup>(六)</sup>

彼は一気にこの一首の歌を歌った。たぶんこのようなチャンスで一首の歌を選んで女の子に送るとは非常に興味深いことだと思っただろう。実は、この歌はより処があるのである。

陸奥国、信夫郡、

紋様に染めて、いつも乱れている。(七)

なんのここのために私の心がひたすら乱れるだろう。

昔の人は、本当に情熱であり、よく風雅をわかっていたよなあ。

## 注

古代日本、桓武天皇が延暦十三年（七九四）年平安京（今の京都）に遷都する以前、都は平城京（今の奈良）にある。本物語の主人公である在原業平がこの古都を舞台背景にして、その青春の恋愛経験の旅を始めた。しかし、各テキストの段落の順序が違うので、本訳文は現存の通行本に従う。

(一) 初冠、また元服という。日本古代の礼儀風俗の多くは中国から来た。

古代中国では、男子が二十才で成人となり、初めて成人の冠をつけ、成人の衣を着て、故にこのように称される。

(二) 春日里は今の奈良市春日山の西の麓にある。

(三) 「窺」というのは物の隙間から物を見るという意味である。日本古代小説の中で、この「窺」はよく男子が無意識的あるいはわざと女の容姿を見て始まった恋の原因に使われる。蓋し古代日本式の建物が広いので、居室内の女は男子に外から窺われやすく、結局恋やデートになってしまう。

(四) 狩りの衣とは、平安時代の男子が狩りの時に着る手軽な服装であり、参内する時の正装と違う。

(五) 「信夫」、日本語は「忍草」の発音と同じである（両方も「しのぶ」shino-bu 読む）。忍草は色を染めることができ、古代日本人はその茎と葉っぱを取って布を染める。その花の紋様はすこし乱れるように見える。また信夫は陸奥国地方（即ち今の日本本州の東北部）にあり、その土地では忍草が産出される。

(六) この和歌は『古今六帖』の第五であり、名が知らない人に作られた。歌の意味は信夫染めの紫色の紋様の乱れを使って、心の恋愛の乱れに喩える。また日本人は古くから紫色に崇め、その色がよく高貴や美しさを代表し、ここで高貴で美しい春日里の姉妹を喩えるために使われている。

(七) この歌は『古今集』恋四であり、河原左大臣によって作られた。主人公はこの歌を使ってすでに乱れている心を喩える。全て姉妹の美しい容姿を垣間見たからである。

【林訳・中国語】

从前，有个男子，初冠<sup>(一)</sup>未几，因领地之缘而前往奈良春日里<sup>(二)</sup>去狩猎。里中住着一对十分标致的姊妹。这男子无意中自墙垣隙缝间窥<sup>(三)</sup>见了她们。想不到，挺不相称的，如此残旧的乡里中竟有这般光景，遂难禁心为之颠倒动摇。这男子将身上穿着的狩衣<sup>(四)</sup>下摆撕下，写了一首歌。他所穿的是信夫染<sup>(五)</sup>的狩衣。

春日野兮信夫染，  
窥得卿貌心乱迷，

若此紫纹兮情难敛。<sup>(六)</sup>

他一口气咏出了这么一首歌。大概认为趁着这样的机会挑一首歌赠予女子，是挺有兴味的事情的吧。实则，这首和歌乃是有所依据的：

陆奥国兮信夫郡，  
染成图纹总纷披，  
底事我心兮徒乱紊！<sup>(七)</sup>

从前的人，可真是热情，解得风雅的啊。

笺注

古代日本，在桓武天皇延历十三年（七九四）迁都平安京（今之京都）以前，都城设在平城京（今之奈良）。本故事主人公在原业平以此旧都为舞台背景，展开其青春情爱经验的行径。然个本段落顺序不一，本译文系根据现存通行本而来。

- (一) 初冠，又称元服。日本古代礼仪习俗率多缘自中国。古代中国男子二十岁而为成人，始戴成人之冠，着成人之衣，故称。
- (二) 春日里在今奈良市春日山之西麓。
- (三) “窥”为自物体之隙缝窥见之意。日本古代小说中，此“窥”之词，多用于男子有意或无意间窥见女子容姿而启恋情悬念之缘由。盖古代日式建筑物较开敞，故居室内之妇女往往易为男子自外窥见而导致恋情或幽会。
- (四) 狩衣，为平安时代男子狩猎时所穿着之轻便装，有别于朝会时之正装。
- (五) “信夫”，日语与“忍草”谐音（皆读为“しのぶ”| shi-no-bu）。忍草可染色，古代日本人取其茎部与叶染布，其花纹图案稍紊乱。又信夫陆奥国地方（即今之日本本州东北部），其地产忍草。
- (六) 此和歌出自《古今六帖》第五，无名氏作。歌意巧取信夫染紫色花纹之紊乱，以喻慕情恋意之乱心也。又日人自古崇尚紫色，其色往往代表高贵，

美丽等意象，此则以转喻高尚美丽的春日里姊妹也。

(七) 此歌出自《古今集》恋四，河原左大臣作。主人公以此歌喻已徒然纷乱之心，盖以窥见姊妹美丽容姿故也。

### 【分析】

林訳と日本古典文学全集の口語訳を比較するとほとんどそのまま中国訳していることがわかる。原文から訳していないため「ついでおもしろきことともや思ひけむ。」の部分を「たぶんこのようなチャンスで一首の歌を選んで女の子に送るとは非常に興味深いことだと思っただろう。」と訳しているのは、明らかに全集の「こういう折にふれて歌を思いつき、女に贈るなりゆきが、愉快的ことと思っただけであろう」の口語訳の影響を受けていると思われる。口語訳にひきずられたため、「信夫」、日本語は「忍草」の発音と同じである（両方も「しのぶ shi-no-bu）」と自ら注をつけているにも関わらず、信夫摺の複雑な文様を活かして自分の心の複雑さを表現しているという歌の肝要な部分に訳の重点が置かれていない。

### 第二段

(本文)

むかし、男ありけり。奈良の京は離れ、この京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけむ、時はやよひのついたち、雨そほふるにやりける。

起きもせず寝もせて夜を明かしては

春のものとして眺め暮しつ

(口語訳)

昔、男がいた。奈良の京は遠ざかり衰え、新たに移ったこの京は、人家がまだ定まらなかった時に、西の京にある女が住んでいた。その女は、世間の並の人以上にすぐれていた。その人は、容貌よりは心がすぐれていたのだった。独り身というわけでもなかったらしい。その女に例の誠実男が、親しく情を通じて、帰ってきて、どんなに恋しく思ったのだろうか、時は三月の一日、雨がしょぼしょぼ降る折に、歌を詠んでやった。

おきもせず……（一夜の語らいに、私は起きてもいず、眠りもしないで、



夜を明かして過ぎしました。朝になると、春のならないとて長雨が降ってきます。それを見やりながら、物思いにふけてまた一日を暮らしてしまいましたよ)

【銭訳】

昔男がいた。奈良から都が移された時、この都の居住者がまだ定まらなかった。右京に女がいた。一般の女と異なつてずば抜けた。心持ちの方は容貌よりさらに優れている。しかし一人暮らしているのではないらしい。この男は彼女に会いに行つて、帰つてきたらなにかを思っている。時は三月の一日、雨がしとしと降り、(彼は) 歌を贈つて言うことには

横になっていた夜眠ることがなく、夜が明けたら春の雨が長い。目を凝らしてしとしと降る雨を眺めると、長い一日がまた夕暮になった。

【銭訳・中国語】

昔有男。奈良迁都時、此京人居未定。右京有女、殊常色、情尤于貌。而不类独居。此情郎往会焉、归来有所思。会三月朔、雨潇潇下、寄之歌云：

偃卧宵无寐 明来春雨长  
凝眸对淅沥 永日又昏黄

【分析】

本文の「まめ男」に相当する訳がない。「西の京」を「右京」と訳しているが、当時の内裏からみて右側（西）が右京であり、その知識を元にしてゐる。

【豊訳】

昔一人の男がいた。あの時の奈良の都では地元の住み人がすでに移されたが、この新しい平安京では家屋の建設がまだ整えていない。この新しい西の京に住む女子一人がいた。この女の性格と容貌は世間並みの女の子より優れ、しかも容貌の美しさのほかに、また高雅な気品を持っている。この人はすでに恋人がいるらしくて、今は独身のわけではない。この男は彼女に対して真心から愛していて、彼女に訪れ、いろいろ話した。帰つてからなにを思つただろう？彼は彼女にこのような歌を送つた。時は三月の初めであり、ちょうど春の雨が續いている時期である。

寝ず座らず徹夜の恋、  
春の雨が續いていて、一日中憂う。

【豊訳・中国語】

第二话

从前有一个男子，在那时候的奈良都，当地居民已经迁走；这新的平安都，家屋还没有建设完整。有一个女子住在这新的西京。这女子的性情和容貌，都比世间一般女子优秀。而且除了容貌美丽之外，另有一种高雅的气品。此人似乎已有情郎，并非至今还独身的。这男子对她有真心的爱，去访问她，谈了种种话。回去之后作何感想呢？他送了她这样一首歌，时在三月初头，正是春雨连绵的日子：

不眠不坐通宵恋，  
春雨连绵镇日愁。

### 【分析】

本文の「まめ男」を「彼女に対して真心から愛している」と意識している。

### 【林訳】

昔、男がいた。奈良の都はすでに廃止されて、この都に住む家はまだ定まらない。<sup>(一)</sup> 都の西の方に女がいた。この女は、普通より優れて抜きん出た。この人は、容貌はともかく、その気立てはもっと素晴らしい。彼女はたぶん独身で一人暮らししているわけではないだろう。<sup>(二)</sup> あのひとすじ思いを続ける男は、<sup>(三)</sup> 懇ろに通いに来て、<sup>(四)</sup> 帰ったら、<sup>(五)</sup> どんなに彼女のことを思っただろうか。時は、三月のついたちであり、雨はしとしと降り、それで一首の和歌を贈る。

起きているのでもなく寝ているのでもない。

夜が明けるまで心がずっと乱れて

しとしととする春の雨、ひたすら眺めた。<sup>(六)</sup>

### 注釈

この段は桓武天皇が平安京に遷都された初めの頃に時間を設定しているが、在原業平は天長二年（八二五）に生まれたので、その初冠時代の恋愛経験はこの段に示されたのより約五十年ぐらい遅れるはずである。言い換えれば、物語は「昔、男がいた」という事跡を五十年間早くした。それは在原業平伝を物語化にしようとするからである。人に虚構であり、実録でない印象を与える。一方、読者もこの本当のような嘘のような状況の下で、読解の楽しみを味わう。

(一) 延暦三年（七八四）、都は奈良より長岡京に遷され、十年後、延暦十參年（七九四）、また平安京に遷された。「この都」は長岡京を指すか、もう一説は平安京を指すと。遷都の初めの頃、古都がすでに廃止されたが、新しい都はまだ盛んになっていなくて、住民もまだ十分定まっていない、故にこのように言う。

(二) この女は独身ではなく、付き合う恋人がいるという。一説は付き合う

- 恋人が一人だけではないとしている。平安時代日本の上流社会の男女関係はかなり開放的（自由）であり、一人の女が多数の男子と付き合いデートするのはよくあり、『源氏物語』『枕草子』などの本を読めば分かる。
- (三) 原文は「真面目な男」、あるいは「慇懃な男」とあり、ここは恋愛においての話なので、じかに「ひとすじに思いを続ける男」に訳した。
- (四) 原文の「物語」（動詞）は「談話」や「愛を語る」に直訳できるが、実はもっぱら男女のあいびきのことを指す。これは日本の古文に慣用される言葉であり、そのまま文章に書いたりすることを避ける。
- (五) 平安時代男女の密会というのは、男が女の住所に赴き、夜が明ける前に、また自分の家に戻る。そして、翌日にできるだけ早く手紙や恋の歌を作り、自分の愛慕を表す（もし女性に礼遇されたら、恨みを示すものも偶に見える）。これは「後朝の文」という。
- (六) この和歌は『古今集』巻十三に見え、恋三、業平作。『新撰和歌』第四。『古今六帖』第一、雨、業平作。歌の意味は：一夜心中を打ち明ける話（密会）をして帰ってきた、起きているのでもなく寝ているのでもなく、恋しく思ってもやまない。朝に呆然としてしとしとと降る春雨を眺め、ひとすじにぼんやり考え込み、また一日を過ごした。一説は「立っているのでもなく横になっているのでもない」、昨日の夢のような密会の状況を指すとしている。どちらが正しいか分からない。また日本語では「眺」が「長雨」と同じく（「ながめ」| na-ga-me）と読み、作者は恋愛に落ちているひとすじに思いを続ける男が呆然として春雨を眺めるという掛詞の意味を使った。

### 【林訳・中国語】

从前，有个男子。奈良的京城已废离，此京邑人家尚未安定。<sup>(一)</sup> 京城西方有个女子。这女子，可为超凡出众。那人儿，容貌固勿论矣，而其心性尤胜一筹。她大概不是单身独居的吧。<sup>(二)</sup> 那痴情男子，<sup>(三)</sup> 殷勤来通情款，<sup>(四)</sup> 回去以后，<sup>(五)</sup> 不知有多么思念呢。时值三月初一，雨水淅淅沥沥下着，遂以一首和歌相赠。

既非起兮亦非寝，  
意乱情迷至天明，  
绵绵春雨兮空眺审。<sup>(六)</sup>

### 笺注

此段文字将时间设定在桓武天皇迁都于平安京之初，而在原业平诞生于天长

二年（八二五），故其初冠时代之恋爱经验，当较本段所示者约迟五十年。换言之，故事将“从前，有个男子”的事迹提前五十年，盖为造成在原业平传之“物语化”，予人以虚构也，非实录之印象，而读者亦得在此若实若虚之状况下，享受阅读之乐趣。

（一）延历三年（七八四），自奈良迁都于长冈京，十年后，延历十三年（七九四），复迁都于平安京。“此京”或指长冈京，一说指平安京。迁都之初，旧京既废，而新的京邑尚未兴盛，住户亦未十分安定，故称。

（二）谓此女非单身，有情人来往。一说则以为来往之情人不止一人也。平安时代日本上流社会男女关系颇开放，往往一女而有多位男子与之交往幽会，读《源氏物语》、《枕草子》等书可知。

（三）原文称“认真男子”，或“殷勤男子”，系就爱情而言，故径译为“痴情男子”。

（四）原文“物语”（动词）可直译为“谈话”，或“谈情”，实则专指男女幽会之情事。此为古代日文习用语，避讳直称之也。

（五）平安时代男女幽会，系由男子往赴女住所，天明以前，复归于其宅；而次日应尽早书写信函或情歌以表达爱慕（若女方对其冷落，亦偶有表示怨怒者），称为“后朝之文”。

（六）此和歌见于《古今集》卷十三，恋三，业平作。《新撰和歌》第四。《古今六帖》第一，雨，业平作。歌意谓：一夜谈心（幽会）回来后，既非醒亦非睡，思念不已。晨朝则茫然眺望春雨绵绵，痴情呆想，又过了一日。一说则以为“既非起亦非寝”，系指昨夜幽会如梦似幻之情况而言。未知孰是。又日语“眺”与“长雨”皆读如（“ながめ” | na-ga-me），作者巧取恋爱中的痴心男子茫然眺望绵绵春雨之双关语意也。

### 【分析】

豊沢同様、「まめ男」を「ひとすじに思いを続ける男」と訳す。注に「原文は「真面目な男」、あるいは「慇懃な男」とあり、ここは恋愛においての話なので、じかに「ひとすじに思いを続ける男」に訳した。」と訳者の自信を示している。

### 第三段

（本文）

むかし、男ありけり。懸相じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらば葎の宿にねもしなむ  
ひじきのものには袖をしつゝも

二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のことなり。

(口語訳)

昔、男がいた。思慕の情を寄せた女のもとに「ひじき藻」というものを贈る、それにつけて、こんな歌を詠んでやった。

思ひあらば……(私を思ってくださる愛情が) おありなら、荒れた家でも満足です。あなたと二人、袖を重ね引き敷いて、心あたたかにそこで共寝をいたしましょう)

ところで、この女というのは二条の後のことで、后がまだ清和の帝の女御としてお仕えなさらず、雲上に上がらぬ並の人でいらした時のことなのだ。

【銭訳】

昔男ありけり。恋する女に藻を送る。六味菜というものである。ついでに歌を送る。

もし本当にあなたを思うことがなければ、なぜ私が寝れなくなるのでしょうか？(あなたを思っているから眠れないのです) 茅屋一人で寝る寂しさ、毎晩ひらすら自分のことを可哀想に思う。

【銭訳・中国語訳】

昔有男。饋所恋女藻菜，名曰六味菜。伴之以歌：

誠无相念苦 何为不成眠

茅屋孤衾味 宵宵空自怜

【分析】

「二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のことなり」の部分訳されていない。延喜式(927年)や『倭名類聚鈔』(934年)には「ひじき」を「鹿尾菜」、「六味菜」と記載されている。『古事類苑』には、「六味菜」とされる。銭氏はこれらを知った上で「ひじき」を「六味菜」と訳したと思われる。歌意としては、原文が「もしあなたが私の思いを受け取ってくれるなら」に対して、銭訳では「もし自分があなたを思っていないなら」と始まり、自分で自分を哀れに思うという内省的な段と解釈している。

【豊訳】

昔一人の男がいた。彼は鹿尾菜<sup>①</sup>を作る用の海藻を自分が好きな女の子に送り、

歌を付け加えた。

もしあなたを思う苦しみを減らすことができれば、  
袖を枕にし、薪の上に寝てもいい。

これは二条皇后がまだ清和天皇をお仕えしていない、まだ普通の身分の女の子の時のことである。

①日本語の「鹿尾菜」は「枕袖」との発音が似ている。

#### 【豊訳・中国語訳】

从前有一个男子，他把一些制鹿尾菜<sup>①</sup>用的海藻送给他所恋慕的女子，附一首歌：

若教能免相思苦，  
枕袖卧薪亦不辞。

这是二条皇后尚未侍奉请和天皇而还是普通身分的女子时的事。

①日语“鹿尾菜”与“枕袖”的发音相似。

#### 【分析】

「ひじき藻」を「鹿尾菜」と訳し、「日本語の「鹿尾菜」は「枕袖」との発音が似ている。」と注している。ここの豊訳は銭訳を参照にしていると思われる。銭訳が原文から離れ、「もしあなたを忘れることができるなら」という日本的な逆説的愛情表現にたって歌意を展開しているのに対し、豊訳の「苦しみを減らすこと」とは思いが相手に通じたらという幸せな前提にたっており、原文に近い。

#### 【林訳】

昔、男がいた。鹿尾菜藻<sup>(一)</sup>という物を彼が慕う女性に贈った。

もし感情があれば共に寝ることができ、  
荒れ果てた屋敷の蔓草を嫌がるのではなく、  
袖を畳んで敷き布団にして一緒に寝よう。<sup>(二)</sup>

この方はまさに二条の后<sup>(三)</sup>だと言われた。その時、彼女はまだ入内していなかった普通のひとの時代であった。

注釈

この段の内容は『大和物語』の一六一段の最初の部分にも見られる。本文は短いけれども、男が好きな女性に物を贈ったとしか語らず、ついでに和歌一首を贈った。その歌には若い頃の青春の熱烈な感情を込められ、男女の愛から同衾することに発展したいという欲望を少しも隠さず、これも無邪気で自然なことではないだろうか？最後、その対象はついに后となる女性であることを明ら

かにした。

- (一) 一種の食べられる海藻である。男女がお互い傾慕する時に贈るプレゼントであり、必ず高貴なものではなく、好きな人からの贈り物であれば、十分貴重である。『詩経』邶風・静女には「静女其姝、俟我于城隅。愛而不見、搔首踟蹰。/静女其娈、貽我彤管。彤管有炜、說怿女美。/自牧歸荑、洵美且異。匪女之為美、美人之貽。」とある。これは対照的に証明する。
- (二) この和歌の言うことには：もしあなたが私を好きになってくれるのであれば、私はつる草が群生する荒れ果てた邸を嫌がらず、袖を下敷きにして、君と一緒にねよう。歌の意味はとても素直で情熱であり、恋愛に落ちる若者の愛と欲望がはっきりと見られる。また、歌の中の「敷き布団」(「ひじきもの」| hi-ji-ki-mo-no) は贈り物の「鹿尾菜藻」(「ひじき藻」| hi-ji-ki-mo) の発音と近いので、掛詞の趣がある。
- (三) 二条皇后高子(八四二～九一〇)は藤原長良の娘である。貞観八年(八六六)、清和天皇の后となる。生んだ子供は後の陽成天皇である。

#### 【林訳・中国語訳】

从前、有个男子。送了所谓鹿尾菜藻<sup>(一)</sup>之物给他所恋慕的女子。

若有情兮得共寝，  
荒屋蔓草非为嫌，  
叠袖为褥兮同衾枕。<sup>(二)</sup>

据云，这一位正是二条皇后<sup>(三)</sup>，当时她尚未进宫仕帝，仍为寻常人身份之时代呢。

#### 笺注

此段文字内容又见于《大和物语》一六一段首部分。本文虽简短，仅言及男子送一物于所恋慕之女子，并附赠一首和歌。其歌则洋溢年少青春之热烈渴慕情怀，丝毫未隐瞒男女由爱而冀盼达到同枕共衾之欲望，宁非天真而自然之事耶？最后，乃点名其对象为终成后妃之女子耳。

- (一) 一种可食之海藻。男女倾慕相赠之礼物，非必为高贵之物，有情之人所馈赠，则可珍贵也。《诗经》邶风·静女：“静女其姝，俟我于城隅。爱而不見，搔首踟蹰。/静女其娈，貽我彤管。彤管有炜，说怿女美。/自牧归荑，洵美且异。匪女之为美，美人之貽。”可相印证。
- (二) 此和歌谓：若卿亦有情于我，已将不嫌蔓草丛生之荒屋，愿将衣袖铺为

垫褥，与之同枕共衾相眠也。歌意十分率真热烈坦白流露恋爱中年轻人的爱慕与欲望。又歌中“褥”（“ひじきもの” | hi-ji-ki-mo-no）与所赠之物“鹿尾菜藻”（“ひじきも” | hi-ji-ki-mo）音近，有双美语趣。

（三）二条皇后高子（八四二～九一〇），为藤原长良女。贞观八年（八六六），为清和天皇之后。其所生子后为阳诚天皇。

### 【分析】

「ひじき」の中国語訳「鹿尾菜」は、「ひじき」が鹿の黒く短い尾に似ているためといわれる。平安時代では「鹿尾菜」ではなく「六味菜」が使われたため、銭氏はそのように訳したと思われる。中国には「ひじき」はあったが、よく食べられるものではなく、『本草綱目』では「羊栖菜」として記述される。豊氏と林氏は「ひじき」を現代中国語の「鹿尾菜」にそのまま訳している。しかし、銭氏はあえて平安時代に用いられた「六味菜」という漢字で「ひじき」の訳としたと思う。

## まとめ

『伊勢物語』の中国訳に関しては、銭訳は『源氏物語』を訳する前の時点であるためか、原文を忠実に訳するというよりも銭氏が愛する平安文学の世界感を訳のなかで表現しているように見受けられる。それが初段の艶めかしい女性と少年という対比や、二段の「右京」へのイメージ、三段の独り寝の苦しみなど、原作を膨らませているような訳にみられる。豊氏は『源氏物語』を訳した上での自信からか、銭訳を参考にしながらも「若紫」を「新緑」、「相思苦」など中国読者が理解しやすいことを優先した訳をしている。林訳は二段の「まめ男」の注のように、『源氏物語』『枕草子』などを訳しながら身につけた平安文学の基礎知識を注として反映している。林氏は初段の訳からわかるように古典文学全集の口語訳を中国語に翻訳したと予想する。今後は、この見通しに基づき、四段以降の三者の訳を分析していきたい。

注1 曾維徳「銭稻孫訳事再考」『東方早報』2014年6月1日の記事。

注2 銭氏の翻訳家、研究者としての人生を日本人研究者との交流や当時の中国史と合わせて歴史的な側面から紹介したものとしては鄒双双氏『「文化漢奸」と呼ばれた男—万葉集を訳した銭稻孫の生涯—』（東方出版・2014年4



月)があり、それまでの先行研究もまとめられている。但し、『伊勢物語』に関しては、錢氏がどの時期に取り組んだのかは『万葉集』訳以降、『源氏物語』訳以前という本文紹介以上ははっきりとはしない。

注3 徐迎春「豊子愷訳『伊勢物語』について」(『文献探求』第48号 p.64-77 2010.3.31)

注4 曾維徳「浅議林文月訳『伊勢物語』訳」(『南方都市報』2014年12月21日の記事)

本稿は、2015年度札幌大学個人研究助成金による研究成果である。